
特別短編小説（修正版）

燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別短編小説（修正版）

【Nコード】

N8342X

【作者名】

燕

【あらすじ】

短編小説置場ですのでご承知下さい。

1-1 初めての出会い

僕はサンダース、森の中で暮らしているんだ。

森の中には2、3匹ぐらいいしかポケモンポケモンがいない程で僕自信の顔ポケモンを見た事はあるけれど・・・。

僕以外の顔は、見たことがない。

僕は雄・・・だけど「雌」と言う異性を見た事が一度もない程に、この森の中でポケモンと会うことは比較的に低いのだ。

「今日は何処のルートを走ろうかな？」

僕はサンダース森の数少ない中の一匹だ。

サンダースはこの森を走るのが大好きで毎日走っている。

「よし！今日はこのルートを走ろう♪」

距離は2、3キロメートルのルートを走る。

サンダースにとっては対した事はない。

毎日走っているその脚は鍛えている事になるからだ。

「走るの気持ちいい♪風が気持ちいい♪」

サンダースは疾づくに半分は走っていた。

スピードも落ちる気がしないその脚は今までの努力と好奇心それと感情が伝わって来る。

努力は毎日走ることであり好奇心は森を知りたい事、そして感情は自分が生きている事に感謝をしている。

けれどもその感情からは悲しい気持ちも感情に染み込んでいる事もあるのだ。

《ぎゅるるるる。》

「お腹すいちゃった。何か食べよう。」

食べ物は調度真上にあり、熟されているオレンの実。味は食べて見なければ分からない。

「頂きます！」

サンダースは木の上に登りオレンの実をとって食べる事にした。

サンダースのお腹を膨れるにはオレンの実を3、4個。

サンダースはその個数分を食べながら頭の中は「ボー」っとしていた。

それは密かに一つの隠れている悲しみである。

サンダースに癒すのはただただ走ること……。

走って鍛えて走って・・・そうやって繰り返して悲しみを忘れようとしていたのかもしれない。

「はぁ、美味しかった♪ご馳走様！」

食べ終えてオレンの実を何個か持っていく事にした。

すると家に帰る途中に倒れているポケモンがいた。

「あつ、ポケモンだ！大丈夫君！？」

「・・・大丈夫・・・じゃないよ。」

「はわわっ！どうしよう。」

サンダースは慌てた。

《ぎゅるるる！》

倒れていたポケモンはお腹を鳴らしていた。

サンダースはもしかやと思いオレンの実をあげることにしてみた。

「お腹空いてるの？ならこれ食べて。」

すると、そのポケモンは鼻を「クンクン」として目を開けた。

「有難う・・・。」

顔を赤くしていたポケモン。

サンダースは初めて有難うと言う感謝と良い事をしたような気持ち。

「お腹空いてたんだね？良かったよ。」

「・・・うん、私2、3日何も食べてなかったから・・・。あつ、私はグレイシア。貴方は？」

「えっ？僕はサンダース。」

サンダースにとっては話すのは初めてだ。

グレイシアはオレンの実を2個食べてまた深い礼をしてくるグレイシア。

「本当に有難う。あの・・・また会える？今度は私が礼を返したいの・・・。」

「あつ、良いよ♪此処で待ってるよ♪」

「良かった♪じゃあまたね♪」

1-2 再開と喜び

僕等は大木の下で待ち合わせをした。

「はあ、はあ。何とか間に合った。」

「グレイシア、おはよう♪」

「はあ、はあ・・・、おはよう♪」

どうやらサンダースはグレイシアよりも早く着いていた。

「あの時は有難う♪私、あのままだったら間違いなく餓死してた。」

グレイシアは深く頭を下げた。

「良いよ、気にしないで♪」

サンダースはそんな事を気にしないタイプであり、それが何よりもの優しさである。

「ねえ、サンダースの家は何処にあるの？」

「家は此処から先、2キロメートル真っ直ぐで綺麗な湖があるから少し歩くと秘密基地があるんだ。」

「へえ〜！行ってみたい〜♪」

「それじゃあ行こう♪」

「おお〜♪」

二匹はサンダースの秘密基地へと行った。

そして僕等はサンダースの家へと向かった。

「ねえ、グレイシア家まで走ってみない？ 風が気持ちいいよ〜♪」

「あっ、良いわよ♪」

そして約3kmの競走をする事になった。

「よ〜い、ドン♪」

グレイシアは合図を出して二匹は楽しそうに走った。

「・・・（毎日、走って来たけど今日だけがとても楽しいなんて・・・どうしてだろう・・・。）」

「・・・（確かに風が気持ちいい・・・。まだ駆け回りたい・・・。この森をもっと・・・もっと・・・。）」

サンダースは「感情」が強くなり、グレイシアは「好奇心」を持っていた。二匹は疲れなんてとうに忘れている・・・。そして僕等は秘密基地へと近づくときサンダースの言う通りに綺麗な湖があった。

「わあ〜♪湖の下が見えるくらいに透明感だよ！」

グレイシアの見た湖は、とてもとても純粹な青色と底が見えるくらの透明度……。

これはご褒美と考えるべきなのか……。

「こんな綺麗な湖産まれて初めて見たよ♪」

「でしょう！？森に囲まれてるから綺麗なんだよ♪」

「へえ。」

僕等は一緒に話した。

楽しかった……。

終えないで欲しい……この時を……。

止めて欲しいこの時……。僕等はそんだけ相手に興味を持ってしまった……。

サンダースの会話には「雌って何？」と言う事を聞いていた。

「雌もしらないの？雌は雄と同じ性別の意味を表すの。雌と雄が……」《以下省略》

サンダースは「雌」と言う事一番知りたかったのだ……おかしい奴と思うかもしれないが森の中だからこそ知れない事もあるのだ。

そして僕等は楽しい会話を終えた……。

空辺りは真っ暗になったからだ。

「サンダース、今日は楽しかったよ……。」

「……僕も。」

二匹はお別れと言う事が重かった。

「また来るから、サンダース。今日は本当に有難う、そして楽しかったよ♪」

グレイシアは180°回転して帰る方向へと向いた。

グレイシアが一步一步踏み出す旅にサンダースの心は闇の中に包まれて行く様に心ぼそかった。

「愛」があつたからこそその「感情」が沸いて来るのだ……。

サンダースの気持ちはずっとグレイシアと……一緒にいたい。

だから……。

「グレイシア！」

グレイシアは足を止めた。

「……何？」

「グレイシア、行かないで……。」

サンダースはグレイシアの所へ走って行きグレイシアの背中を後ろから抱き着いた。

「さっ、サンダース／＼／？」

「グレイシア・・・行かないで・・・／＼／。」

これは一回だけのチャンスなんだ・・・。

グレイシアとずっと死ぬまで一緒にいたいから。

「サンダース・・・／＼／＼／＼／私達は会ったばかりだよ？／／／」

「あつたばかりだから何だって言うんだよ／／／。グレイシアと一緒にいたいよ。」

二匹の心拍数は上がっていく・・・。

「私達は・・・／／／。」

「そこまで言うなら奪ってやる／／／！」

サンダースの顔はグレイシアの顔に近づき唇同士がくっつきあった。

「サン・・・ダース／／／。」

二匹は目を閉じて愛を分かち合ったのだった。

「・・・分かった？サンダース／／／。これが恋何だよ？この気持

ちは好きって事なんだよ／／。」

「これが恋／／、グレイシアが好き／／。ずっと一緒にいたい。」

・僕等は月の光を浴びてサンダースとグレイシアは抱き合うのでした・。

2-2 ぎこちない翼

私はラスティーぎこちない翼の持ち主でラティ族のその一匹・・・
ラティアス・・・。

私はいつも「無理」と言う言葉を使ってしまう。

「無理」を言ってしまうえば自分は弱い自分とも思えてくる・・・。

私はその「弱い」と言う事を自分の確信してる。

飛行特訓中の中・・・私と兄さんで行った。

「ほら、飛んでみる？」

兄さんの名前はラスベル種族はラティオスと確信しているはずだ。

「無理よ！私には飛ぶことなんて出来ない！」

「何を言ってるんだ！？お前は飛べる！世界一綺麗に飛べる妹だ！」

兄さんは私の事を気遣ってくれるラスベル・・・。

それを為にも思わないラスティーであった。

「飛ぶなんて・・・私には出来っこない！」

私は出来るはず・・・いや、飛べる筈なのにやらないからだ。

やらない理由はいくつかあるのだ。

「出来ない、出来ないと繰り返して飛ぼうとしないだけじゃないか

！」

「飛びたくないよ！！だって・・・空が・・・空が怖いんだもん。」

「ドラゴンタイプが空を怖がるなんて聞いた事がないぞ！お前は行けるよ怖い空なんかないんだよ！！！」

「無理よ・・・。雷が怖い・・・空高いのが怖い・・・私には出来ない・・・。」

私は、無理無理と兄さんに言い付ける。

「・・・はあ。今日はもう良い。先に帰るからな。」

ため息を吐いた兄さんは今日の所を諦めてくれたけど・・・。諦められると私は申し訳ないと兄さんには強く思っている。飛べない事に私は弱い・・・。今日も明日もあさっても

・・・きつと弱いままなのだろう。

知っている・・・いや分かっている事なのだ・・・。

私は「無理」と言う言葉を使ってしまうから。

「無理」を一回使ってしまったえばミスをした。

二回使ってしまったえば癖がついてしまい・・・。

三回以上は私は止められなくなってしまう。

今私は何十回も何百回も言っている。

だから私は完全に止められない……。

「はぁ……。空か……。」

ラストイーは空を見上げていた。

それは私以外のポケモン達が気持ち良さそうに飛んでいた。

彼等の翼は空と一心同体になっているかの様に……空飛ぶポケモンは美しい……。

空を飛ぶから美しい……。

だったら逆だったら私は飛べないし格好悪くて気持ち悪い。

そんな風に、私自身を思っているのかもしれない
……。

「皆も……兄さんも私の事をどう思ってるのかな……。」

私はそこで眠りについた
……。

私には無理だ……。

2-2 明日見る翼

「……んゝ。あつ、夕方になってる……。私そんなに寝てたんだ……。」

ラストイーは起きると空はオレンジ色に輝いた。

空が怒っているように私を怪しく照らしてくる太陽の光……。

そんな様に思えてしまう事……。それが、飛べない一つの理由でもある。

「飛びたくない事で何が悪いの……。空と太陽なんて嫌いだよ……!」

ラストイーは太陽に向かって大きな声で叫んだ。

夕日が沈めば今度は冷たい空となって私を一人ぼっちにさせる。

「ラストイー!こんな遅くまでそこにいたのか!?心配したんだぞ!?!」

ラスベルはラストイーの帰りが遅いのでわざわざ迎えに来てくれたのだ。

「あつ、兄さん……。」

ラストイーは、自然に涙をこぼしていた。

「どうした？」

ラスベルはラストイーの目を見た。

「うわあああん！兄さん！！」

ラストイーは兄さんの胸に飛び掛かる。

「・・・どうしたんだよ？ラストイー・・・。」

ラスベルはラストイーが泣き止むまで優しく抱いていた。

「ラストイー、涙の訳を教えて？」

ラスベルは優しく声をかけた。ラストイーは泣き止むのが落ち着き・・・ラストイーは本当の気持ちをラスベルに告白した。

「・・・兄さんが私の事を嫌いになってるんじゃないかな・・・と思うって。」

「ラストイーを嫌いになる？なわけないだろう？僕はラストイーが好きだよ。」

兄さんは私の事を嫌いではなかった・・・。

「本当？」

「本当だよ。・・・全く思い込みの激しい妹だなあ。出来損ないの妹だよ本当に・・・。」

「だって……。」

「理由は聞きたくないよ……。別に飛べなくても僕は負担なんて掛からない訳だしな。」

「……。」

ラストイーは落ち込んだ。

「ただ……。僕の気持ちは一緒にお前と共にこの広い空を飛びたい。」

「一緒に……飛びたい？」

「嗚呼。飛ぶ事はお前の為に教える訳ではない。お前と飛びたいから僕自身の為に教えるのだ。それは、ラストイーが好きだから……。」

「に、兄さん／＼。」

今、本当に兄さんの気持ちが伝わった。

これが兄さんの気持ち。

兄さんは私と一緒に空を飛びたい……。

それは妹が好きだから。ラストイーは心が変わったのだった。

「私……飛べるかな？」

「飛べる！さあ、一緒に飛ぼう。翼に心を込めて見てごらん？」

兄さんは私を待っている。だから「無理」と言う言葉はもう使いたくない。兄さんの「為」に私は空を飛ぶ！

「兄さん！今、飛ぶよ！私、かっこよくなりたい！！美しく飛び回って兄さんと一緒に空を飛び回りたい！空なんて怖くない！兄さんと一緒に怖くない！！」

「そうだ！僕と一緒に飛び回ろうラスティー！」

「うん！」

そしてラスティーは目を閉じて「無理」を貫け！

そして……。

私は地から空へと浮いた
……。

そしてラスティーは目を開けた。

「飛べた……。」

「やった！やったよ！ラスティー！やれるじゃないか！！流石俺の妹だよ！」

兄さんは涙を流していた。これで兄さんと一緒に飛べる……。

私の大好きな兄さんと。

「やったよ！兄さん！一緒に空を飛ぼうね！」

「ああ！」

こうして「無理」を貫き新たな挑戦へと挑むラストイーは・・・。

「兄さん／＼／＼♪（兄さんは私のもの／＼／＼♪）」

「さあ、行こうか／＼。」

「うん／＼／＼♪」

今度は兄さんの心を奪う事でした・・・。

兄妹愛・・・End

3-1 小説の中の小説家

この空の下で私は生きている。

私の名前はフィル。

種族は、エーフィ……。

私の夢は小説家になる事が夢である。

「……僕は、………鳥……い。」

フィルは小説を書きながら口に出して書いていた。

そして30分が経ち原稿に一つの小説が出来た。

「さて小説の題名が欲しいわよね。何にしましょうか……？」

この小説に似合う題名を考えた。

《鳥と僕……》

いや、もっと題名に好奇心を持たせたい……。

こう言うのはどうだろうか……？

《鳥は何故空を飛ぶのだろう……》

「……決めた、『鳥は何故空を飛ぶのだろう……？』これなら読む人達はきっと好奇心を持ちだがるかもしれない……。」

私はその題名に賭けてみた。

「さあ、読んでみるとしますか♪」

その原稿を両手で掴んで最初に題名が目映る。
ファイルは小説を読み始めた・・・。

（小説）

《7月15日・・・》

僕は森の中に来た。

一つ木の上に、ある親子の鳥がいました……。親は餌を探しに森の中を探します。

子供はまだ飛べないからその母親の帰りを待っている……。

「鳥日記を初めてみよ！一日一日の事をこの日記に書くんだ！」

僕は調度夏休みで自由研究と言う宿題がある。

僕はその親子鳥の日常を書くことにしてみた。

「“子の鳥”はいつ飛ぶのだろう……。鳥日記はその子の鳥について書いてみよう見るとしましょう。」

そして僕は明日もこの森に行く事にした。

7月16日……。

親は子に餌をあげていた。子は欲しいと言わんばかりに親の前で大きく口を広げた。

餌をくれと言っているに違いないだろう。

母親はその口の中に餌をやる。

子はその餌を美味しそうに味わって食べていた。

そして、子はまた、口を大きく広げて餌をくれと言っている。

流石に母親は餌を持っていない事がわかる。

なので母親はまた新たな餌を探すため、住家と子を離れる事になるのだ。

「親鳥は忙しいんだな。」

日記に書いて僕は家に帰る事にした・・・。

そして七日間を放置して見る事にして見た。

7月24日・・・

そして七日間が経ち子は成長していたのだった。

子は何故かしょんぼりとしている様にも見えたが気のせいだろうか？

「親が来ないなあ・・・？」

何時間待っても母親の姿が見れなかった。

僕はその事を日記に書いて家に帰る事にした。

何故だろう・・・。

7月25日・・・

やはり今日も母親は来なかった・・・。

すると子の鳥は異常な行動を見せたのだ・・・。

「あっ、危ない！」

子の鳥は巣から離れようとしていた。

巣から離れれば自殺行為と一緒にだ・・・。

「何をやってるんだ！戻れよ！」

けど子は巣から離れようとしている。

そして・・・。

鳥は巣から落ちて木の下へと真っ逆さまに落ちた
・・・。

僕は思わず目をギュッと閉じる。

想像が頭から浮かんでくる。

死ぬ・・・。

少しだけ目を開けると子は不器用に空を飛んでいた。

「えっ？」

完全にはないけれど子は初めて空を飛べたのだ。

けど完全ではないから地上に足をついてしまう。

巣から離れた事により帰れない事を意味にする。

「あっ、あれは母親？」

すると子に近づいていく母親の姿があった。「どう言うこと？」

疑問を持ってしまった。

子を捨てた母親が何故子の前に姿を現したのか？

すると母親は地上にいる子に近づいたが巣の方へと飛んでしまった。

更に疑問を持った。

子を見つめて母親の鳴き声が聞こえてくる。

それを聞いた子は母親に連れて鳴いていた。

すると子は翼を広げて飛ぼうと必死に翼を羽ばたいていたのだった。
少しだけ分かった様な気がする・・・。

何故、母親は子から離れたのか？何故、母親は子に近づかないのか？
それは・・・。

「自立する為に子離れをしたのかな？」

そう、自立する為に母親は子に冷たくしたのだ。

子は飛ぼう、飛ぼうと繰り返し・・・羽を何回も羽ばたいたが、地上に降りてしまう。

けどあともうちょっと！

「頑張れ！！」

子はまた・・・翼を羽ばたき空を飛ぶ事にした。

母親は鳴きながら子を応援している様にも聞こえた。

そして子は応援によって翼を強く羽ばたいた。

すると・・・。

「おおー！」

子は見事に飛んだ。

それは長く長く空を飛び続けていた。

母親は子の近くへ行き一緒に空を飛んだ。

僕は感動した。

鳥日記を書いて僕は家に帰る事にした。

明日になれば親子達はいなかった・・・。

子は自分で生きる為に餌を探しているだろう。

それが自立だ。

「もう、親子達は帰って来ないのか・・・。」

巣から離れた親子達を寂しい気分にもなった。

そしてまだ決めていない 題名を書いた。

それは・・・。

鳥は何故空を飛ぶのだろう・・・？

僕は何故と言う事に親子を見て理解した。》

「初めて書いたけど小説を書くのって楽しいな♪」

私はまたペンを持ち、

小説を書くことにしました。

夢を追う為に・・・。

自立の為に・・・。

私は歩む・・・。

4-1 熱い眼差し

僕は前から気になっているポケモンがいた……。

それは……。

—熱い眼差し—

僕はポケモン学園を毎日通っている……。

熱中の夏……僕らは授業を受けていた。

《キーン、コーン、カーン、コーン》

5時間目だった授業は終えて帰宅する。

「ああ、やっと終わった〜！」

俺はヒロヤ、種族はブースター。

「ヒロヤ〜、一緒に帰ろう？」

俺に話掛けた相手はヒリヤ、種族は俺と同じで幼なじみ……。

「あつ、良いよ。」

俺等はいつも、毎日家まで帰っている……。

そう、どんなに喧嘩をしても……どんなにお互いが嫌いになって

もその友達の線は断ち切れないぐらいだった・・・

のだが・・・。

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

僕等は最近話をする事がなくなっていた。

それは自然と話をしない
。。。。

それだけではなく顔を向き合わなくなっていた。

そして僕等は家の前まで来ていた。

「じゃあなヒリヤ・・・・・・・・。」

「また明日・・・・・・・・ヒロヤ。」

何故だろう・・・僕等はこんなにも話をしなかったのか・・・。

あんなに話合っていた僕たちなのに・・・。

「ただいまぁ・・・・・・・・。」

ヒロヤはそのまま部屋へと行き、眠ってしまったのだった。

(ヒリヤ・・・。)

俺はいつの間にか夢の中にいた。

夢の中にはヒリヤがいたのだった。

最近、夢の中でヒリヤが現れてくるのだ。

何故だろう・・・。朝6時鳥。ポケモン達の囀りが聞こえてくる。

「んゝ、もう朝か・・・。」

ヒロヤは学園に行く準備をしていた。

朝が辛いヒロヤには、だるい気分がいっぱいであった。

「行ってきます。」

パンを口に加えたまま家のドアを開けると外にはヒリヤが待っていた。

「おはよう、ヒロヤ。」

「・・・おう。」

俺達はまた登校する事になった。

相変わらず俺達は話をしなかった・・・。

「あつ、あのさ・・・。」

「えっ？」

ヒリヤはヒロヤに声を掛けた。

今日、ヒリヤが声を掛けてくるなんて何年ぶりだろう。「ヒロヤって・・・好きなポケモンって・・・入る？」

「なっ、何だよいきなり

／／／！？」

突然ヒリヤは好きなポケモンを聞いてきた。

俺の好きなポケモンは誰だろう。

自分でも分からない。

「いないに決まってるだろう！？」

「・・・そうなんだ。（良かった・・・。）」

ヒリヤはホッとした様な顔だった。

「なあ、ヒリヤ。」

「えっ？何？」

「何で帰りや登校中、俺に話し掛けないんだよ？（俺だってそうか。）」

「・・・だって／＼／」

ヒロヤから顔を背けたヒリヤの顔は赤くなっていた。

「なあ、どうしてだよ？何で顔そっち向くんだよ？」

「・・・だってヒロヤの事がすつ・・・・・・・・いや、何でもない／＼」

「すっ？」

「なっ、何でもないから／＼／」

「言いかけて終わるなよ！？気になるだろう！？『すっ』て何だよ？」

「だから／＼！好きって言ってるの！？・・・あっ！言っちゃった・・・／＼／」

「えっ／＼／」

ヒリヤは俺の事が好きだったのか・・・？

俺は顔を真っ赤にしまった。

「すっ、好きなら何で俺に話し掛けてくれないんだよ？」

「・・・ヒロヤには好きなポケモンが入るんじゃないかって・・・。」

「・・・だから話し掛けなかったのか？」

「うん／＼・・・けど、ヒロヤには、好きなポケモンがいなくて今知ったから・・・もう良いんだ♪」

「俺はずっと、さみ・・・いややっぱいいや。」

「さみ？」

「いや何でもない！（寂しかったなんて格好悪いよなあ。）」

「もしかして寂しかったの？」 「ぎくっ・・・。」

「図星ね。ごめんねヒロヤ貴方の事ばかり考えていたらヒロヤには好きなポケモンが入るんじゃないかって話しずらかったし、話さなかった・・・。」

ヒリヤはヒロヤの事で頭が沢山だったのだ。

それが原因となり二匹の仲が悪かったんだとヒロヤは確信した。

「それじゃあ普通に接してくれるよな？」

「・・・ダメよ。」

「えっ？ どうしてだよ!？」

「ヒロヤはまだ言っていないから／＼（告白を・・・。）」

「何を？」

「だからヒロヤは私の事をどう思ってるの／／／？私は言ったよ？
ヒロヤの事が好きだって／／／！？」

ヒリヤは恥ずかしくて目を閉じた。

「えっ／／／！（まさか此処で告白タイム！？）」

俺の気持ちは・・・。

いつも産まれた時から幼なじみでずっと一緒にいた。

ヒリヤといると楽しかった。

ヒリヤと何があってもずっと一緒だった・・・。

だけど、俺の気持ちは・・・。

「俺も・・・大好きだよ／／／！だからこの前みたいに接してくれ
／／／！」

「ヒロヤ／／／。」

ヒロヤからの告白・・・。

ヒリヤの答えは勿論。

「私もヒロヤの事が大好きよ／／／！ずっと死ぬまで一緒にいてね
／／／♪」

「ああ／＼／＼！」

こうして俺達は楽しく人生を歩んだ。

大切なポケモン・・・

大切な時間・・・

俺達はずっと死ぬまで一緒だ・・・。

5-1 優しい女の子

此処は森、年中雪である伝説のポケモンフリーザーが住んでいると言われている。

フリーザーが存在する限りこの森は雪は終わらない。

年中寒いこの森に羽根が綿菓子のような鳥ポケモンがいた。

それはそれは・・・

優しい優しい女の子・・・。

チル「はぁぁ、寒いなぁ。」

私の名前はチル！

年中寒くて私の口から白い息が呆れる程出てくる。

けど私の羽根は綿菓子の様にふかふかしていて暖かい・・・。

すると私の視界にとっても寒そうにしているポケモンがいた。

チル「僕寒い？」

「・・・うん。」

男の子は頷いた。

チル「それじゃあ私のふかふかなお布団にお入り♪」

チルは小さな男の子を私の暖かい羽根で包んであげた。

すると、その男の子はちよつとマシになった顔をしていた。

チルは男の子とお話をした。

チル「私はチルよ♪僕、名前は？」

ブイ「僕の名前はブイだよ。種族はイーブイ何だけど色違い何だぁ
くくく。普通のイーブイの毛並みは茶色何だけどくくく。
僕は白なのくくく僕、普通のイーブイが良かった。」

この子はイーブイのブイ母親はエーフィで父親はブラッキーである。

ブイは自分だけが白いイーブイで、自分が嫌になっていたのだった。

チル「くくくふふっ♪白いイーブイだなんて希少から希少過ぎて貴
方の毛並みがイーブイの中で綺麗だよ？」

ブイ「けどくくくこの毛並みのせいで皆は僕を遠ざけるんだくくく。

だから生きてるのが嫌になってきちゃったんだ。こんな色違いな僕
だから

くくく。」

チル「うくん、それは皆が間違ってるよ。

ブイは何も悪い事や嫌がらせはしてないでしょう？

君は良い子だから自信を持ちなさい？

ブイを一生懸命産んでく
れた両親達に悲しい顔は見せたくないでしょ？」

ブイ「・・・うん。」

ブイは笑顔になった。

チル「そうよ♪

ブイは幸せ者よ♪」

ブイ「うん！僕は幸せ者だよ♪チルは良いポケモンだね♪」

チル「ふふふ♪」

二匹は体を充分に暖まり我が家に帰ったのでした
・・・。

6-1 喧嘩番長!!

ある学園に生徒や学校を守るヒーローがいた・・・。

この学校に学園の中で一番! いや、リーダーで強く皆に憧れ、心の奥底では優しい心を持ったポケモンがいた・・・。

それは・・・。

「た、助けて・・・!」

私は運悪く、お使いでお金をもっていた。

まだ幼いポケモンのルリリは不良達に絡まれていた・・・。

「お金貸してくれれば良いんだよ?

何もしないから・・・ね?」

小さな子に集っていた。リザードン、バンギラス、リングマだった。

バンギラス、リングマ「くくく・・・。」

ルリリ「助けて!!」

リザードン「ほら、いい子だからさ?」

リザードンは優しくそうな顔をしてルリリに集っていた。

ルリリ「やだよ・・・やだ・・・誰か、助けてええええええ！」

リザードン「黙って金を渡せば良いんだよ!!?」
おい、てめえら!

この悪い子を縄で縛りつけ・・・」

「悪い子はお前達だろう？」

小さい子を大人3人寄って集ったりなんかして・・・情けない奴等だ。」

すると何処からか声がした。

それは何処から見ても声の主はいない。

リザードン「だ、誰だ!?!」

リングマ「ぐああ!!」

バンギラス「リングマ!?!がはっ!!!!」

そして二匹は一撃で倒れてしまったのだった。

リザードン「何!?!」

リザードンがルリリの方を見たがいなかった。

「小さい子を泣かせる奴は!

この喧嘩番長ガブリアス様が許さぬぞ!!!!」

リザードン「け、喧嘩番長だと!?!」

するとリザードンの視界に喧嘩番長がいた。

姿はマントを着たガブリアス、眼瞼に傷が出来ていた・・・。

リザードン「て、てめえ！俺達の獲物を返・・・！」

ガブリアス「返す前に腹あ、一発殴らせろ。」

リザードン「は、速い・

・・・ぐああ！！！！」

話しおえる前に懷にガブリアスはいた・・・。ガブリアスは腹に一発殴り、リザードンは気絶してしまった。

ルリリ「あ、あの！

有難うございます！！」

喧嘩を見ていたルリリは

ガブリアスにお礼を言った。

ガブリアス「ふふふ、

今日こそ正しい道を進んだ・・・。

正しい道こそが我に力を与えてくれよう。

この小さな子に感謝と言う言葉でな・・・。

さらばだ小さき者よ・・・」

そして喧嘩番長は死ぬまで正しい道を進むのだった・・・。

正しい道に弱いと言う言葉はない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8342x/>

特別短編小説（修正版）

2011年11月20日16時24分発行